

学術セミナー

学術セミナー 1

座長 桐田 忠昭

奈良県立医科大学医学部 口腔外科学講座

学術セミナー2

座長 小澤 幸彦

医療法人社団ゆうあい会 ゆうあいクリニック

学術セミナー3

座長 藤内 祝

横浜市立大学大学院医学研究科 顎顔面口腔機能制御学

学術セミナー4

座長 桐田 忠昭

奈良県立医科大学医学部 口腔外科学講座

学術セミナー5

座長 金子 明寛

東海大学医学部 外科学系口腔外科学

学術セミナー6

座長 森 良之

自治医科大学医学部 歯科口腔外科学講座

学術セミナー7

座長 光藤 健司

横浜市立大学大学院医学研究科 顎顔面口腔機能制御学

学術セミナー8

座長 嶋田 淳

明海大学歯学部 口腔顎顔面外科学分野1

学術セミナー 1

共催 メルクセローノ株式会社



GS1 「頭頸部がん薬物療法ガイドランスを踏まえた再発・転移頭頸部がんへの治療戦略: セツキシマブ(アービタックス)併用化学療法のバリエーション」

仲野 兼司
がん研有明病院 化学療法部 総合腫瘍科

2015年7月に「頭頸部がん薬物療法ガイドランス」が発表された。これは頭頸部癌への薬物療法について、具体的な薬剤の選択、用量設定、スケジュールなどについてまとめられており、既存の「頭頸部癌診療ガイドライン」「口腔癌診療ガイドライン」の内容を補完するものとなっている。現在のがん診療、特に薬物療法においては、エビデンスに基づいた治療が求められているが、必ずしもすべての患者が臨床試験に沿った適格基準を満たしている訳ではない。特に、頭頸部がんにおいては、合併症や病変部位、社会的背景などによって必ずしもエビデンスレベルの高い治療を行うことが適切ではない事態に遭遇することがしばしば見られる。

現在、再発・転移頭頸部がんへの治療においては、抗EGFR抗体薬のセツキシマブ(アービタックス)を用いた薬物療法が治療の主軸となっているが、その際に併用する抗がん剤の選択に際しては患者状態とエビデンスの双方を理解した上で、バランスの取れた治療戦略を取ることが求められる。

本セミナーでは、セツキシマブ(アービタックス)を用いた治療戦略のうち、最もエビデンスレベルの高いEXTREME試験に基づいた治療レジメンと、タキサン系抗がん剤を併用するレジメンを主に取り上げ、それぞれの適切な選択基準について「頭頸部がん薬物療法ガイドランス」に基づいて解説する。

略歴

2000/4	京都大学医学部医学科入学
2006/3	京都大学医学部医学科卒業
2006/4/1-2008/3/31	静岡県立総合病院 初期研修医
2008/4/1-2012/3/31	癌研有明病院 化学療法科・血液腫瘍科 レジデント
2012/4/1	がん研有明病院 化学療法部 総合腫瘍科 医員

学会

日本内科学会 内科認定医、日本臨床腫瘍学会 がん薬物療法専門医

論文

- Nakano K, Sato Ya, Toshiyasu T, Sato Yu, Inagaki L, Tomomatsu J, Sasaki T, Shimbashi W, Fukushima H, Yonekawa H, Mitani H, Kawabata K, Takahashi S. Predictive factors of head and neck squamous cell carcinoma patients' tolerance to high-dose cisplatin in concurrent chemoradiotherapy. *Molecular and Clinical Oncology* 2015. In press.
- Nakano K, Motoi N, Inagaki L, Tomomatsu J, Gokita T, Ae K, Tanizawa T, Shomiji T, Matsumoto S, Takahashi S. Differences in the responses to pazopanib and the prognoses of soft tissue sarcomas by their histological eligibility for the PALETTE study. *Jpn J Clin Oncol* 2015; 45: 449-55.
- Nakano K, Motoi N, Takahashi S. The CYVADIC regimen as a combination-chemotherapy treatment option for advanced soft-tissue sarcomas originating from nonextremities. *Intern Med* 2015; 54: 187-93.
- Nakagawa T, Nakano T, Masuda R, Iwazaki M, Kumahira I, Nakamura N, Nakano K. Pyothorax-associated lymphoma: complete remission achieved by chemotherapy alone. *Gen Thorac Cardiovasc Surg* 2014; 62: 258-61.
- Nakano K, Inagaki L, Tomomatsu J, Motoi N, Gokita T, Ae K, Tanizawa T, Shimoji T, Matsumoto S, Takahashi S. Incidence of Pneumothorax in Advanced and/or Metastatic Soft Tissue Sarcoma Patients during Pazopanib Treatment. *Clin Oncol (R coll Radiol)* 2014; 26: 357.
- Nakano K, Takahashi S, Yuasa T, Nishimura N, Mishima Y, Sakajiri S, Yokoyama M, Tshuyama N, Ishikawa Y, Hatake K. Feasibility and Efficacy of Combined Cisplatin and Irinotecan Chemotherapy for Poorly Differentiated Neuroendocrine Carcinomas. *Jpn J Clin Oncol* 2012; 42: 697-703.

国際学会

- Nakano K, Kawai A, Araki N, Ando Y, Machida M, Yoshida P. Clinical outcome of pazopanib for liposarcoma patients from post-marketing surveillance sub-analysis. Poster presentation, abstract ID: POSTER 79. CTOS 20th Annual Meeting, 2015, Salt Lake City, Utah, the United States.
- Takahashi S, Tahara M, Kiyota N, Yamazaki T, Chayahara N, Nakano K, Inagaki L, Toda K, Enokida T, Minami H, Imamura Y, Sasaki T, Suzuki T, Fujino K, Dutcus C. Phase II study of lenvatinib (LEN), a multi-targeted tyrosine kinase inhibitor, in patients (pts) with all histologic subtypes of advanced thyroid cancer (differentiated, medullary and anaplastic). Poster discussion session, abstract number: 995PD. 39th ESMO Congress 2014, Madrid, Spain.
- Nakano K, Sato Ya, Sato Yu, Toshiyasu T, Kawabata K, Takahashi S. Predictive factors of cisplatin completion/discontinuation in concurrent chemoradiotherapy to locally advanced head and neck cancer patients. Poster session, abstract number: 3.175. 17th ECCO-38th ESMO-32nd ESTRO European Cancer Congress 2013, Amsterdam, The Netherlands.
- Nakano K, Yuasa T, Nishimura N, Mishima Y, Sakajiri S, Yokoyama M, Hatake K. Efficacy and Feasibility of Combined Irinotecan and Cisplatin therapy for Extrapulmonary Small Cell Carcinomas. Poster session, abstract number: 9.332. 16th ECCO-36th ESMO-30th ESTRO European Cancer Congress 2011, Stockholm, Sweden.

学術セミナー2

共催 医療法人社団ゆうあい会 ゆうあいクリニック


**GS2 放射線医学領域のTheranosticsと課題
—RSNA/QIBAの活動の重要性—**

井上 登美夫
横浜市立大学大学院医学研究科 放射線医学

我が国のPET検査はFDGを中心に、現在では全国で年間50万件を超えるPET検査が行われるようになってきている。PET/CTの出現がPET検査の普及の大きな要因となったのは疑う余地はないが、最近のトピックスとしてはPETとMRIを同時撮影するPET/MRの薬事承認ならびに保険適用がなされたことがあげられる。この一体型PET/MRの臨床的有用性は、PET薬剤やMRI装置の新規技術開発によって相乗的に高まることが期待される。

一方で、乳がんのハーセプチン治療に代表されるTheranosticsと言われる分子標的薬治療と診断の一体化の概念は、放射線医学領域でも導入され、その研究が活性化されつつある。特に分子標的薬と免疫PET、分子標的RI内用療法とPETの研究が注目されてきている。

このようなTheranosticsの概念に基づく医療を普及するにあたり、治療効果の客観的かつ高精度な判定が求められる。北米放射線学会が2007年にQuantitative Imaging Biomarker Alliance (QIBA)という組織を立ち上げ、例えばFDG-PETのSUVのような画像データから抽出される定量データを普遍化し、バイオマーカーとしていく作業を進めている。その対象は、CT、MRI、PET、USと多岐にわたっており、その国際化に向け日本への協力が求められている。

略歴

昭和52年3月 群馬大学医学部 卒業
同年4月 群馬大学 教務部 医学部放射線医学講座 入局
昭和55年1月 群馬大学医学部附属病院 中央放射線部 助手
昭和57年7月～昭和60年 関東通信病院 放射線科
昭和60年5月 群馬大学 医学部 核医学講座 助手
平成1年 同 講師
平成4年 同 助教授
同 同上 附属病院 放射線部 助教授(兼任)
平成6年6月より7年8月まで 米国テキサス大学 M.D.Andersonがんセンター
診断放射線部 核医学部門に留学 Post-doctorial fellow
平成7年9月 群馬大学 医学部 核医学講座 助教授
同上 附属病院 放射線部 助教授(兼任)
平成13年9月 横浜市立大学医学部 放射線医学講座 教授
同上 附属病院 放射線部 教授(兼任)
平成15年4月 横浜市立大学大学院医学研究科 放射線医学 教授
平成20年8月より23年4月まで 横浜市立大学 先端医科学研究センター長(兼任)
平成26年4月より 横浜市立大学附属市民総合医療センター 病院長(兼任)

(学会活動)

平成23年10月より 日本核医学会 理事長
平成24年4月より 日本医学放射線学会 理事

(賞)

昭和58年 第21回 日本核医学会賞
平成15年3月 貢献賞：「第35回日本原子力学会賞」社 日本原子力学会より

学術セミナー 3

共催 山本ビニター株式会社



GS3 癌治療におけるハイパーサーミアの役割

今田 肇
戸畑共立病院 がん治療センター

ハイパーサーミアは、1990年代までは放射線治療の増感として、43℃の腫瘍温度を達成できれば、著明な局所効果が達成できることは広く知られ、頭頸部癌、乳癌などで高いエビデンスが得られてきた。しかし、実際には有効な温度上昇を得ることができないことの方が多く、臨床的に使用する機会が徐々に減少していった。その後、40℃程度の比較的低い温度で、抗癌剤の増感が期待できることから、マイルドハイパーサーミアという概念で化学療法と使用されることが多くなっている。

化学療法と温熱療法の併用によるメリットは、薬剤の増感効果による抗腫瘍効果だけにとどまらず、副作用のために化学療法ができない患者においても、低容量の抗癌剤での十分な治療効果の確保が実現できる点、また、薬剤耐性がおきにくい、長期にわたって治療が継続できる点があげられる。当院では、化学放射線治療との根治治療での併用、癌化学療法との集学的治療として広く使用しており、特に頭頸部腫瘍に比重を置いて、その経験を報告する。

温熱療法により、癌治療根幹が大きく変わるわけではないが、患者のライフスタイルに合った優しい治療を提供でき、患者満足度の高い補助療法であるといえる。標準治療に適応すれば治療効果の上乗せが期待でき、標準治療から逸脱した症例でも、低容量の化学療法でも一定の効果が得られる点で、もっと広く認知されるべき治療であろう。

略歴

1987年(S62)3月	産業医科大学卒業
1987年 4月	産業医科大学放射線科入局
1990年(H2)4月	放射線衛生学 助手
1994年(H6)	放射線科 助手
1997年	放射線科 講師
2003年	放射線科 助教授
2008年 4月	戸畑共立病院 がん治療センター センター長
2014年	戸畑共立病院 副院長・がん治療センター センター長

学術セミナー 4

共催 ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社



GS4 科学的根拠に基づいた口腔癌の切除と再建

栗田 浩
信州大学医学部 歯科口腔外科学教室

【抄録】

口腔扁平上皮癌 (OSCC) の完全切除は局所制御については患者の予後に重要である。腫瘍の完全切除には、大きな安全域を伴った拡大切除が望ましい。しかし反面、過度の拡大切除は、機能障害や審美障害を惹起し QOL を大きく損なう。そのため、OSCC の切除においては最小かつ適切な安全域の設定が必要である。また、OSCC では癌の周囲に異形成上皮を伴うことが多くその扱いも苦慮することが多い。

Upile は、頭頸部癌の切除に metric approach と barrier approach という概念を提唱している。metric approach は、いわゆる“量”的な切除で、腫瘍周囲の安全域の量を確保した切除であり、barrier approach は、解剖/病理学的な防御構造を目安とした切除である。

本セミナーでは、上記の概念を念頭に OSCC 切除時の切除範囲の設定および適切な安全域量、および、現在の標準治療について考える。

【主な内容】

- ① 切除断端の状態が予後に与える影響
- ② 癌周囲の異形成上皮の扱い
- ③ Metric approach- 適切な安全域の量
- ④ 癌及び周囲の異形成上皮の完全切除におけるヨード染色の有用性
- ⑤ Barrier, Anatomic, biological approach
- ⑥ 現在の標準治療

略歴

1987年 3月 新潟大学歯学部歯学科卒業
 1987年 6月 信州大学医学部附属病院 医員
 1995年 4月 信州大学医学部附属病院 助手
 1996年 11月 医学博士・博士(医学) [信州大学]
 1997年 4月 信州大学医学部附属病院 講師
 1997年 10月 文部省在外研究員 スウェーデン カロリンスカ大学歯学部
 2001年 6月 信州大学医学部 准教授
 2011年 7月 信州大学医学部 教授
 現在に至る

【主な所属学会、専門医など】

日本口腔外科学会・指導医、日本口腔腫瘍学会・口腔腫瘍専門医、日本頭頸部癌学会、日本癌治療学会、日本がん治療認定医機構がん治療認定医・暫定教育医(歯科口腔外科)、日本口腔科学会、日本顎顔面インプラント学会認定医・指導医、日本口腔インプラント学会・指導医、日本顎関節学会・指導医、日本有病者歯科医療学会・専門医、日本口腔ケア学会、など

学術セミナー 5

共催 第一三共株式会社



GS5 顎骨骨髓炎に対する超選択的動注法を用いた抗菌療法

廣田 誠

横浜市立大学大学院医学研究科 顎顔面口腔機能制御学

慢性下顎骨骨髓炎はしばしば難治性であり治療に難渋することが多い。近年はクラブ酸カリウム・アモキシシリン、メトロニダゾール、シタフロキサシンなど顎骨内への抗菌効果が期待できる薬剤が使用されているが、それでもなお骨髄炎が遷延する場合も少なくない。浅側頭動脈からの逆向性超選択的動注法は、舌・顔面・顎動脈に特殊なカテーテルを留置することによって、口腔内の病変に高濃度の薬剤を持続的に投与できる治療方法である。近年、放射線との同時併用による抗がん剤の投与は口腔がん治療において優れた治療成績を残しているが、われわれは抗菌薬療法を施行するも経過不良であった慢性下顎骨骨髓炎に応用し、下顎骨への超選択的動注化学療法を行っている。この発表では、難治性となった下顎骨骨髓炎に対して動注化学療法が奏功した症例を紹介し、広い範囲の顎骨切除が適応となる顎骨骨髓炎における手術回避の治療方法としての動注法の有効性について検討したので報告する。

経歴

1998年3月 日本大学松戸歯学部卒業
2002年3月 横浜市立大学大学院医学研究科（口腔外科学専攻）修了
2002年4月 横浜市立大学助手（医学部口腔外科学）
2004年9月 同講師
2007年4月 公立大学法人横浜市立大学准教授
現在に至る

研究留学

2006年10月—2007年3月
ドイツ、エアランゲン—ニュルンベルク大学歯学部顎顔面口腔外科
2012年4月—2013年9月
米国、カリフォルニア大学ロサンゼルス校歯学部weintraub center

受賞歴

2013年 第95回米国顎顔面口腔外科学会年次集会 E-poster Award

学術セミナー 6

共催 協和発酵キリン株式会社


**GS6 口腔がん化学療法による発熱性好中球減少症の発症抑制を目指して
—ペグフィルグラスチム(ジーラスタ®)を用いた支持療法—**

小泉 敏之

横浜市立大学大学院医学研究科 顎顔面口腔機能制御学

がん化学療法を行う多くの患者さんで好中球減少症が発現する。特に、発熱を伴う好中球減少症は「発熱性好中球減少症 (febrile neutropenia ; FN)」と呼ばれ、感染リスクが高まり、時に生命の危険を及ぼすがん化学療法の重大な合併症である。そのため、好中球減少症が認められた場合には、がん化学療法剤の減量や投与間隔の延長を余儀なくされる場合があり、十分な治療効果が得られないことによる生存率の低下が危惧されていた。既存の G-CSF 製剤 [フィルグラスチム (グラン®) 等] は、がん化学療法後の好中球減少症を中心とする各種の好中球減少症の治療および造血幹細胞の末梢血中への動員に対して広く使用されているが、口腔がんの FN に対する予防投与が認められておらず、がん腫やレジメンによらず FN 発現リスクに基づき予防投与が可能な G-CSF 製剤の適応が求められていた。ペグフィルグラスチム (ジーラスタ®) は、フィルグラスチムの血中半減期を延長する目的で Amgen Inc. (米国) が創製した薬剤で、本邦では、がん腫やがん化学療法レジメンを問わず「がん化学療法による発熱性好中球減少症の発症抑制」の効能・効果で 2014 年 9 月に承認された。使用にあたっては日本癌治療学会「G-CSF 適正使用ガイドライン」に従い判断されると思われるが、実際には施設ごとで使用状況にはばらつきがあるものと考えられる。本セミナーでは FN の問題点やリスク、さらに FN 発症の抑制を目指したペグフィルグラスチム使用の実際について述べる。

経歴

- 1994年 北海道大学歯学部歯学科 卒業
 東京大学医学部附属病院 口腔外科 医員 (研修医)
- 2000年 東京大学大学院医学系研究科 外科学専攻 修了
 東京大学医学部 口腔外科学講座 助手
- 2004年 三井記念病院 歯科口腔外科 医長
- 2009年 横浜市立大学附属病院 歯科・口腔外科 助教
- 2012年 東京医科大学医学部 口腔外科学講座 講師
- 2014年 横浜市立大学附属病院 歯科・口腔外科・矯正歯科 講師

学術セミナー 7

共催 東レ株式会社／東レ・メディカル株式会社



GS7 頭頸部癌に対する動注併用放射線治療の役割

不破 信和
伊勢赤十字病院 放射線治療科

悪性腫瘍に対する抗がん剤の動注療法は 1950 年代から始まったが、頭頸部癌から開始された。当初は X 線透視下ではなく、色素を入れることで位置を確認する方法が行われてきたこともあり、高い臨床的評価を得ることは出来なかった。1980 年代に入り、米国でセルジンガー方式による大腿動脈からカテーテルを挿入する方法が、日本では浅側頭動脈から腫瘍の栄養動脈にカテーテルを選択的に挿入する方法が開発された。また Robbins らは高用量の CDDP と、その中和剤であるチオ硫酸ナトリウムを同時に静脈から投与方法 (RADPLAT) を開発し、動注療法は再び注目されるようになった。

近年、頭頸部進行癌に対する全身投与の化学療法と放射線治療の併用による化学放射線療法の有効性が確認されつつあるが、亜部位により、その感受性は大きく異なる。感受性の乏しい亜部位は声門癌、舌癌に代表される口腔癌、上顎癌であり、これらが動注療法の良い適応と考えて良いであろう。

選択的に栄養動脈に薬剤を投与することが、治療効果に大きく寄与するが、浅側頭動脈からの動注において、複数の栄養動脈がある場合は外頸動脈からの投与が一般的であった。しかし、その治療効果は症例により差があることは避けられなかった。我々は長期留置が可能で、かつフレキシブルな材質であるアンスロン PU カテを用いたシースと、マイクロカテを世界で最初に開発し、臨床応用を開始した。本ランチョンセミナーでは頭頸部癌動注療法の現状と課題、新規開発したシースの使用経験と役割について述べる。

略歴

昭和56年6月	三重大学病院研修医
同年9月	浜松医科大学放射線科入局
昭和59年7月	愛知がんセンター放射線治療部勤務
平成10年4月	同部長
平成18年4月	同副院長兼務
平成19年9月	南東北がん陽子線治療センター長
平成24年4月	兵庫県立粒子線医療センター院長
平成27年4月	同名誉院長、伊勢赤十字病院 放射線治療科 部長

学術セミナー 8

共催 ウシオ電機株式会社



GS8 紫外線照射によるチタンインプラントの光機能化, 基礎と臨床

廣田 誠

横浜市立大学大学院医学研究科 顎顔面口腔機能制御学

デンタルインプラントの成功の鍵を握る大きな要素として、チタンと顎骨との結合；osseointegrationの強さが挙げられるが、チタン表面が骨組織と結合する能力はインプラントの製造後、経時的に劣化していくことが近年明らかにされた。チタンエイジングと呼ばれるこの現象はチタン材料の製造後早期から起こるとされ、これを改善し、チタンが本来持つ骨組織との結合力を獲得するための手段として紫外線照射によるインプラントの光機能化技術が考案された。光機能化は、複数の特定波長の紫外線を一定の強度・時間でチタン表面に照射することで得られる。この処理により表面の化学的汚染が取り除かれ、インプラント表面は超親水性となって血液との親和性が著しく向上し、さらに表面電荷が変わることにより骨芽細胞の接着性も向上し、その結果、骨—インプラント接触率が飛躍的に上昇する。光機能化によって得られる osseointegration は、より早く、より強固なものであり、臨床の場においては初期固定が得られにくい埋入部位などにおいてその効果が発揮されるものと考えられる。

経歴

1998年3月 日本大学松戸歯学部卒業
 2002年3月 横浜市立大学大学院医学研究科（口腔外科学専攻）修了
 2002年4月 横浜市立大学助手（医学部口腔外科学）
 2004年9月 同講師
 2007年4月 公立大学法人横浜市立大学准教授
 現在に至る

研究留学

2006年10月—2007年3月
 ドイツ、エアランゲン—ニュルンベルク大学歯学部顎顔面口腔外科
 2012年4月—2013年9月
 米国、カリフォルニア大学ロサンゼルス校歯学部weintraub center

受賞歴

2013年 第95回米国顎顔面口腔外科学会年次集会 E-poster Award

ご案内

プログラム

特別講演

招聘講演

シンポジウム

ワークショップ

学術セミナー

アフタヌーンセミナー
イブニングセミナー看護師・歯科衛生士
セッションノミネートホスター
ディスカッション

一般演題

発表者別索引